

担任教師と英語専任講師のギャップをどう埋めるか  
—アンケート調査と授業観察の結果からの考察—

How to Bridge the Perception Gaps between Homeroom Teachers  
and Japanese Teachers of English

長田恵理

Eri OSADA

上智大学大学院外国語学研究科博士後期課程

*Sophia University*

*Graduate School of Foreign Studies*

*Doctoral Program in Linguistics*

**Abstract**

This study investigated the teaching of EFL in Japanese elementary school classrooms by using a questionnaire and analyzing teachers' utterances. A questionnaire consisting of 91 items examined how much in-class activities reflect the guidelines and compared the curriculum guidelines with the teachers' perception of English classes. This was done based on the teachers' self-assessment, as well as how different or similar the responses were between the Japanese teachers of English (JTE) and the homeroom teachers (HRT). Most of the items relating to the municipal curriculum guidelines obtained high scores, which means that in-class practices are mostly in line with what the local board of education expects. However, some items showed significant differences in response between the homeroom teachers and the Japanese teachers of English, such as the perceptions of the contents and the way to conduct team-teaching. Teachers' utterances in the classrooms were then analyzed by categorizing them. The results showed that such differences might arise from distinct role-sharing between the JTEs and HRTs as well as their perceptions of teaching beliefs. In order to bridge those gaps, it is necessary to secure sufficient time for arranging lessons between the JTEs and HRTs, and provide effective teacher training.

**Keywords**

Elementary School EFL Education, Perception Gaps, Teachers' Roles

## 1. はじめに

2007年度の公立小学校における英語活動実施率は97.1%であり、この数字だけをみると来るべき2011年の第5、6学年における外国語活動必修化の準備は着々と進んでいるかのように見える。しかし実際のところ、たとえば第5学年においてはその50%強が45分を1コマとして年間11時間以下の運用であった(文部科学省, 2008b)。また同報告書によると、市町村独自の小学校英語活動に関する教員用の手引きの作成有無については「作成あり」が320市町村、「作成なし」が1,478市町村であり、都道府県・指定都市独自の教員用の手引きの作成有無については「作成あり」が26都道府県・市、「作成なし」が38都道府県・市となっている。「小学校学習指導要領解説 外国語活動編」(文部科学省, 2008a, p.18)によると、

……学級担任の教師または外国語活動を専門に担当する教師が指導計画の作成や授業の実施を行うことが求められるのである。……外国語活動を実施する際に、児童に活発なコミュニケーションの場を与えたり、さまざまな国や地域の文化を児童に理解させるなど、国際理解教育の推進を図ったりするためには、指導者に、ある程度、英語をはじめとする外国語を聞いたり話したりするスキルや、さまざまな国や地域の文化についての知識や理解が求められる側面もあることから、ネイティブ・スピーカーや、外国生活の経験者、海外事情に詳しい人々、外国語に堪能な人々の協力を得ることも必要と考えられる。

とあり、ティームティーチング(以下TT)による授業を念頭に置いているようにとれる。小学校における英語活動等国際理解活動推進事業拠点校においてはすでに試作版の『英語ノート』および指導資料を用いて、学級担任(以下HRT)が外国語指導助手(以下ALT)、日本人の英語活動指導員(以下JTE)とともにまたは単独で英語活動を行っており、至る所でその報告がなされてきているが、大半の小学校現場では、英語力を中心とする教員の負担や不安(金澤・伊東, 2008)、教材開発や準備のための時間の確保(Benesse 教育研究開発センター, 2006)、ALTやJTEなど授業を支援する人材の必要性(北條・松崎, 2008)など抱えている課題も多いようである。

## 2. 先行研究

鬼本(2006)は小学校における学級担任とALTの役割分担についての研究を行った結果、ALTが授業の「主導的役割」を果たし、担任の主な役割としては、1)授業全体の方向性や児童の授業への取り組みを示す、2)ALTの話す内容についての補足説明をする、3)ALTとの英語での会話を積極的にすることにより授業の雰囲気活性化を、4)児童とともに積極的に行動することにより積極的に学習活動に取り組む姿勢を示す、などがあることがわかった。

Miyazato(2007)は、高校における日本人英語教師と英語母語話者である英語指導助手(以下AET)の役割を、コードスイッチングの観点から観察した。その結果、AETが主導権を握るTTのクラスにおいて、日本人教師は言語面のみならず心理面・文化面において

生徒とAETの間の橋渡し役を果たし、AETの発言の理解を生徒に促したり、生徒を励ますなどに日本語を用いる一方で、生徒の発言を訳してAETに伝えたり、AETの発言をわかりやすい表現に置き換える、またはインプットを増やすなどのために英語を使用していることがわかった。

また、泉(2007)は小学校英語指導者の資質について、学級担任は1)小学校英語教育の意義、役割、目的を理解し、2)異文化素材の掘り起こしと教材化、指導ができ、3)指導目標に沿って年間指導計画および学習指導案を作成して授業を円滑に行って児童の達成度を評価でき、4)視覚教材やジェスチャーを用いるなど英語の特徴を理解してうまく活用し、5)明るく元気で楽しい授業を展開し、子ども中心の授業ができることが必要であると、一方、日本人講師については1)教材や活動のアイデアが豊富にあり、2)英語活動についてアドバイスができるとともに積極的に指導でき、3)ALTと学級担任の間に立って両者の関係を取り持ち、4)児童の反応や理解を見ながら状況に応じて指導でき、5)児童のALTの発話理解を支援し、6)日本人として英語を話すモデルとなることが望まれる、と述べている。

### 3. 研究目的

本研究では、質問紙を使用してHRTおよびJTEが捉えている英語活動の内容と行政から与えられている手引きに記されている内容が一致しているのか、またHRTとJTEがそれぞれに捉えている英語活動の内容に差があるのかどうかについて調べた。さらに、実際に授業でどのような行動の違いになって表れているかをHRTおよびJTEの役割から分析したうえで、英語を教えることに自信があるとは限らない担任教師と英語専任講師との考えの違いをどう埋めるかについて考察する。

## 4. 研究方法

### 4.1 調査対象

調査対象市は2005年に英語教育特区となり、1,2年生が年間16時間、3~6年生は年間35時間の英語活動を、通常はHRTとJTEのTTで行っている。なお、各クラス月1回程度のALT訪問があり、その場合は3Tによる授業となる。市内には小学校が23校あり、児童数が約1,000人の大規模校から約50人の小規模校まで多岐にわたる。本調査では、市内23小学校の5年生のHRTおよびJTE各1名ずつ計46名に質問紙調査を実施した。また、質問紙調査実施に先駆けて、3校の5,6年生の授業観察を各1回行った。この3校は、市内中心部の各学年4クラスある市内一の大規模校と各学年2クラスの中規模校、および農村部にある各学年1クラスの小規模校である。

### 4.2 調査方法

2006年9月にR小学校、2007年3月にQ小学校、同4月にP小学校の授業観察を行った。Q、R小学校は5年生の授業を観察したが、P小学校は6年生を観察対象としたのは訪問したのが4月と年度初めであったためである。授業はビデオカメラに収められ、のちに文字に起こした。

2007年11～12月に実施された質問紙調査では、5段階尺度(1:まったくあてはまらない, 2:あまりあてはまらない, 3:どちらともいえない, 4:だいたいあてはまる, 5:よくあてはまる)を使用した。質問数は市が配布している手引きに準じた項目に関する59問と、授業観察のコーディング方法の1つであるCOLT Observation scheme(Spada & Fröhlich, 1995)に関する項目32問の合計91問であるが、本研究では手引きに準じた項目59問についてのみ検討する(質問内容と調査結果は本稿p.72・73の参考資料参照)。

## 5. 結果と考察

### 5.1 質問紙調査

HRT, JTEともに約8割(HRT 76%, JTE 81%)の項目が平均4.0以上であったが、#17「料理を作るなど、実体験活動をしている」(HRT 平均 1.87, 標準偏差 0.87, JTE 平均 2.10, 標準偏差 1.17)と#57「調べ学習を取り入れている」(HRT 平均 1.96, 標準偏差 0.88, JTE 平均 2.68, 標準偏差 0.76)については、HRT, JTEともに点数が低かった。

調査対象市では市独自のレッスンプランに沿って英語活動が行われており、そのシラバスはトピックシラバスと構造シラバスの折衷である。レッスンプランは挨拶、ウォームアップ(歌・チャンツ, 前時までの復習など)から始まって、トピックセンテンスの導入後、アクティビティ・ゲームが行われるという流れにある。このなかに「実体験活動」や「調べ学習」を組み込もうとすると打ち合わせや場所の確保等相当の準備時間が必要となるが、本調査と同じ市内の小学校教員に英語活動についての質問紙調査を行った江川(2006)によると、回答した教員の75%が授業の打ち合わせ・準備時間が十分に確保できないと述べており、この2つの活動が現状では実施困難であることがうかがわれる。

次に、HRTの回答とJTEの回答の差を検証するためMann-WhitneyのU検定をしたところ、以下の項目について統計的有意差( $p < .05$ )がみられた。

- #7 「担任と英語活動指導員, ALTの役割を明確にし, 授業を進めている」
- #10 「歌を使って指導している」
- #33 「顔の表情を意識させるようにしている」
- #39 「遊び感覚を大切にしている」
- #46 「歌・チャンツを取り入れている」
- #51 「子ども全員が最後まで参加できるゲームをしている」
- #53 「児童受信型のゲームをしている」
- #57 「調べ学習を取り入れている」
- #59 「TTを行う人と呼吸をあわせて授業を進めている」

なかでも#7および#59については、いずれもJTEの平均(#7-4.05, #59-3.91)がHRTの平均(#7, #59ともに4.43)よりも低くなっている。市から与えられているプランの自校化をはかるなど授業内容の決定者であるJTEが、前述した打ち合わせ時間の確保の問題もあり、TTの現状についてなんらかの課題を抱えているようである。

## 5.2 授業観察

文字に起こした授業観察スクリプトのなかで HRT と JTE のターン数および発話数を数え、発話の内容について分類した。

### 5.2.1 ターン数の比較

授業観察における JTE および HRT のターン数は表1のとおりである。ターンの数え方は基本的には1人が連続して行った発話のかたまりを1ターンとしたが、連続して話していても話題が変わったと思われる場合には別のターンとして計算した。

表1 JTE および HRT のターン数

	School P	School Q	School R
JTE	134(79.76)	47(66.20)	137(75.27)
HRT	34(20.24)	24(33.80)	45(23.73)

\*( )内は%

Q 小学校が他の2校と比べて HRT および JTE の発話数が少ないのは、観察日が学年末最後の授業で児童の発表が中心の授業展開であったためである。JTE と HRT の発話の比は P,Q,R の順にそれぞれ4:1, 2:1, 3:1と異なるが、いずれにせよ JTE が主導権を握っていることがわかる。このことは、鬼本(2006)の研究における ALT の役割を調査校では JTE が果たしているということの意味しているといえよう。

### 5.2.2 発話の内訳

表2, 表3は P, Q, R 小学校の JTE, HRT の発話を各々合計したうえで、内容によって分類、かつそれぞれの発話数全体に対する割合を表したものである。JTE のターンは複数のセンテンスから成ることがたびたびあり、内容によって細分化したために上記のターン数よりも発話数が多くなっている。一方、HRT の発話数に関しては児童と個別に話しているなど聞き取り不可能な場面があり、コーディングできない発話を除いているため、上記のターン数よりも発話数合計が少なくなっている。

JTE と HRT の発話の内容についての違いについて特に顕著な点は、JTE の発話は英語活動を言語学習として支えていくためのものが多いのに対し、HRT の発話はクラスルームマネジメントに関するものが多いということである。JTE の発話の大半は「質問」(28.2%)「指示」(22.9%)「褒める」(12.7%)または「児童の発言を繰り返して確認する」(7.9%)というような言語学習が占めている一方、HRT は「指名」(35.2%)「指示」(22.7%)が過半数を占めている。また、JTE の「指示」はほとんどが英語で授業の流れを作っていくものであるのに対し、HRT の「指示」は多くが日本語で「席に戻ってください」「拍手して」など行動・態度に関する指示であることも特徴的である。

表2 JTE の発話の内訳

内容	発話数	JTEの全発話数に対する割合(%)
児童に質問する	100	28.2
児童に指示を出す	81	22.9
児童を褒める	45	12.7
児童の発言を繰り返す	28	7.9
モデルを示す	25	7.1
その他コメント	18	5.1
児童の支援	14	4.0
挨拶	11	3.1
児童の発言を修正して繰り返す	10	2.8
児童の質問に答える	9	2.5
依頼	5	1.4
説明	4	1.1
感謝	2	0.6
通訳	1	0.3
T2 との対話	1	0.3

表3 HRT の発話の内訳

内容	発話数	HRTの全発話数に対する割合(%)
児童を指名する	31	35.2
児童に指示を出す	20	22.7
その他コメント	8	9.1
児童に質問する	7	8.0
モデルを示す	4	4.5
児童を褒める	4	4.5
挨拶	4	4.5
児童を励ます	3	3.4
児童の支援	2	2.3
T1 との対話	2	2.3
児童の発言を繰り返す	1	1.1
通訳	1	1.1
しつけ	1	1.1

発話数自体については、HRT の発話数が少ないからといってただ目の前で行われている活動を見ていたわけではない。HRT は常に教室内を見渡し、必要に応じて個別に児童の支援をしていたがビデオにその音声が入っていないだけである。

こういった結果はレッスンプラン作成時からJTEが英語活動の主導権を握っていることを考えれば当然であると同時に、週に1回各クラスを訪問するだけで普段から児童をみているわけではない JTE にとって、児童それぞれを個別に支援するのはたやすいことではなく、クラスのことをよく理解している HRT が指名したりクラスルームマネジメントをするのは理にかなったことである。

### 5.3 考察

以上のことからわかるのは、JTE と HRT はレッスンプランを事前に渡しているとはいえ、ほとんど打ち合わせのない状況下であって明確に役割分担をしながら授業を進めているということである。「共同作業」を円滑に進めるのに不可欠な要素の1つは「役割分担の明確化」である(鬼本, 2006)から、この点で調査対象市については「共同作業」がうまくいっているように思われる。一方で、質問紙調査の#59「TT を行う人と呼吸をあわせて授業を進めている」に関して HRT(平均 4.43)と JTE(平均 3.91)の間に有意な差があるということは、HRT が思っているほど JTE は「共同作業」がうまくいっているとは思っていないようである。この2つの相反する結果は、役割分担がなされてはいるがそれが打ち合わせによってあらかじめ予定されたものではないため、お互いの満足度に違いが出ているのではないかと考えられる。

また、「歌・チャンツ」に関する2つの項目において JTE と HRT の平均値に有意な差(HRT>JTE)があるが、授業の中で「歌・チャンツ」に割いている時間は当然ながら同じであり、それを「やっている」とみなすのか「あまりやっていない」とみなすのかの判断が分かれている。「子ども全員が最後まで参加できるゲームをしている」(HRT>JTE)についても同様である。このことは、英語を教えることを専門としているが教員の免許を持っているとは限らない JTE の「言語活動」として授業をみている感覚と、全人教育を行う機関である小学校の教員からみている感覚の差かもしれない。その差を埋めるために JTE は「学校目標」など全科を通した学校単位での取り組みを知り、「全人教育としての外国語活動」を考える必要がある。また、たいいていの HRT は教員養成課程において英語指導について学んではいない。歌・チャンツ・ゲームといった授業で使えるアクティビティを知ることは、近い将来、英語活動をせざるを得ない HRT にとって喫緊であろうが、外国語(英語)教授法の理論もある程度知っておく必要がある。小学校英語活動を意味のあるものにするためには小学生の発達段階を考慮し、音声中心で進める指導方法や教材の開発をさらに工夫しつつ、全人教育の場である小学校に最もふさわしい方法で行う必要がある(岡・金森, 2007)。言語教育面、学校教育面の両面における理論的な共通理解があれば TT がより効果的に行えるのではないか。

さらに、授業観察の結果でみると JTE が児童を「褒める」ところでは HRT も同じように「褒めて」いてもいいはずだが、JTE の褒めている回数と HRT のそれは必ずしも一致していない。筆者は先日、1時間という短時間ではあるが教員研修のお手伝いをさせていただいたが、どのようなタイミングでどういう声掛けをしたらいいのかよくわからない、という担任教師からの意見があった。調査校では JTE または ALT が英語のインプット役を果たしているので必ずしも英語で褒める必要はないのかも知れないが、もし英語力の差が担任の出番を制限しているのだとしたら、まず「褒める」、次に「クラスルームイングリッシュを用いた指示」と段階的に担任の役割を増やしていくと、より TT が効果的なものとなるだろう。

## 6. 結論と今後の課題

調査した市については HRT, JTE ともに約8割の項目が平均 4.0 以上(よくあてはまる・だいたいあてはまる)であったことから、概ね行政が意図している授業を行っているようであ

る一方で、調べ学習や実体験学習といった体験的活動はあまり行われていないようである。この2つは、新指導要領解説を鑑みても英語活動の大切な部分であると考えられる。TT で英語活動が行われる場合、こういった体験的学習は HRT と JTE の綿密な打ち合わせなくしては成り立たないため、打ち合わせ時間の確保が必要である。

また、JTE と HRT のギャップを埋めるためには、それぞれの研修方法をよく検討する必要があると考えられる。JTE と HRT がそれぞれ違う視点から授業をみつめることも悪いことではないが、JTE は英語だけでなく「全人教育」を念頭に置くことで、より英語活動を小学校という現場に合わせた形で行うことができるし、HRT はアクティビティの引き出しを増やすだけでなく、外国語(英語)教授法の基礎を知るような研修の場をもつことで文部科学省が掲げている「担任主導」の英語活動が実現するのではないだろうか。

本研究は英語教育特区下という特殊な環境にある小学校を調査対象としたため、一般化するためにはさらに多くの授業を観察、分析する必要がある。今後、状況によっては担任教師が単独で英語活動を行っていかねばならない小学校もあると思われるが、授業でインプット役をしていると考えられるJTEの発話を詳しく分析することで「どのような英語力を身につければ担任が単独でも英語活動を行えるのか」についての示唆もできよう。さらに、今回の質問紙調査および授業観察はJTEとHRTに限ったものであるが、今後ALTとHRTのTTによる授業の観察や、ALTへの質問紙調査も行いたいと考えている。

## 7. おわりに

小学校の現場が来るべき英語必修化に対して不安を抱いている場合の多くは、教員が英語力に自信がないことからきていると考えられる。本研究の結果が今後、カリキュラム作成や教員研修を行うにあたって何らかのお役にたてれば幸いである。

## 参考文献

- Spada, N. & Fröhlich, M. (1995). *COLT Observation Scheme - Coding Conventions and Applications*. Sydney: National Centre for English Language Teaching and Research.
- Miyazato, K. (2007). Investigating team-teaching relationships through code switching. In K. Bradford-Watts (Ed.) *JALT 2006 Conference Proceedings*, 80-90. Tokyo: JALT.
- 泉 恵美子 2007. 「小学校英語教育における担任の役割と指導者研修」『京都教育大学紀要』110号, pp.131-147.
- 江川純子 2006. 「小学校英語活動の実践的報告と提言～児童期言語獲得に関する特徴を踏まえて～」宇都宮大学修士論文.
- 岡 秀夫・金森 強(編著) 2007. 「第2章 小学校における英語導入の背景と現状、課題」『小学校英語教育の進め方』成美堂. pp.16-21.
- 鬼本ますみ 2006. 「英語活動の TT における HRT と ALT の役割の分析: タクティクスを用いた分析の試み」『日本児童英語教育学会・研究紀要』25号, pp.17-34.
- 金澤延美・伊東弥香 2008. 「『英語活動』に関する公立小学校教員の意識調査—小学校英語の指導者の資質と指導者研修について—」『小学校英語教育学会紀要』8号, pp.61-68.

Benesse 教育研究開発センター 2006.『第一回小学校英語に関する基本調査(教員調査)』

ベネッセコーポレーション.

北條礼子・松崎邦守 2008.「現職小学校教員の小学校英語活動(支援、校種間連携、研修希望内容等)への意識に関する調査研究」『小学校英語教育学会紀要』8号, pp.97-104.

文部科学省 2008a.「新学習指導要領 小学校学習指導要領解説:外国語活動編」

Available:[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/syokaisetsu/index.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syokaisetsu/index.htm)  
[2009年1月]

文部科学省 2008b.「平成19年度小学校英語活動実施状況調査 集計結果」

Available:[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/20/03/08031920/002.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/03/08031920/002.htm)  
[2009年1月]

### 参考資料(質問紙調査結果)

質問番号	内容	HRT	JTE
		平均	平均
1	本時のねらいを明確にして授業に臨んでいる	4.61	4.71
2	ゲームなどの活動はねらいに迫るものになっていると思う	4.61	4.50
3	コミュニケーション活動を中心とした授業作りをしている	4.70	4.57
4	子どもの思いや考えを伝えあうコミュニケーション活動になるようにしている	4.09	4.29
5	視覚的なもの、共通教材の活用等の工夫を心がけている	4.78	4.67
6	子どもの興味・関心を大切に教材・教具作りをしている	4.65	4.62
7	担任と英語活動指導員、ALTの役割を明確にし、授業を進めている	4.43	4.05
8	一人一人の子どもが生き生きとする活動を心がけている	4.65	4.52
9	積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を身につけられるような指導をしている	4.52	4.57
10	歌を使って指導している	4.87	4.43
11	ゲームを使って指導している	4.96	4.86
12	スキットを使って指導している	4.44	4.68
13	身近で簡単な英語を使う場面をもうけている	4.35	4.32
14	積極的に会話する場面をもうけている	4.52	4.55
15	外国の文化や生活についての理解を深めるような場面をもうけている	3.48	3.68
16	コミュニケーションの楽しさ、英語にふれる楽しさを体験させる活動をしている	4.35	4.29
17	料理を作るなど、実体験活動をしている	1.87	2.10
18	子どもの思いが反映されるような場面を設定している	3.64	3.77
19	1時間で定着させようとは思わない	4.48	4.73
20	誤りは細かく訂正しない	4.18	4.45
21	活動に応じて授業の場所をかえたり、机を移動したりしている	4.13	4.45
22	授業形態の工夫をしている	4.17	4.10
23	できるだけモデルとなる英語をたくさん聞かせるようにしている	4.43	4.55
24	「聞く」「話す」を中心に行っている	4.87	4.91
25	英語のリズムや音に慣れる活動をしている	4.65	4.36
26	「話してみたい」という意欲や関心が高まるような授業を心がけている	4.39	4.45
27	英語のスキルを身につけたり、多くの知識を得たりすることを目的に <u>して</u> <u>いない</u>	3.50	3.25
28	外国の人と物怖じせずにコミュニケーションしていこうという態度を育てている	4.13	4.50

質問 番号	内容	HRT	JTE
		平均	平均
29	説明をしたり、覚えることを強要したり <u>していない</u>	4.09	4.18
30	体を動かす活動をしている	4.74	4.64
31	楽しい活動を心がけている	4.91	4.91
32	声の大きさ・調子を意識させるようにしている	4.30	4.59
33	顔の表情を意識させるようにしている	3.61	4.19
34	ジェスチャー、ボディランゲージを意識させるようにしている	4.22	4.33
35	グループ活動をしている	4.65	4.62
36	ペア活動をしている	4.65	4.81
37	たくさん話させるような活動をしている	4.74	4.52
38	協力し、助け合うような活動をしている	4.22	4.43
39	遊び感覚を大切にしている	4.57	4.19
40	「忘れて当たり前」という考えに立って指導している	3.83	4.19
41	中学校の先取りにならないようにしている	4.18	4.35
42	子どもが間違っただけを言った場合、必要に応じて正しい英語を聞かせ、子どもが自分で気づいていくような指導をしている	4.30	4.38
43	文字を導入 <u>していない</u>	3.78	3.18
44	挨拶を取り入れている	4.96	4.91
45	ウォームアップをいれている	4.87	4.91
46	歌・チャンツを取り入れている	4.96	4.59
47	身体表現を入れている	4.83	4.57
48	ゲームのルールに子どもたちの意見を取り入れている	3.00	3.23
49	クリスマスなどの行事との関連を考えた授業をしている	4.87	4.86
50	目的が明確なゲームをしている	4.57	4.41
51	子ども全員が最後まで参加できるゲームをしている	4.74	4.23
52	できるだけ全身運動を伴うゲーム・遊びを取り入れている	4.17	4.05
53	児童受信型のゲームをしている	3.79	3.41
54	児童発信型のゲームをしている	3.89	4.00
55	英語絵本の読み聞かせをしている	3.39	3.73
56	お店屋さんごっこなどのロールプレイを行っている	3.91	4.36
57	調べ学習を取り入れている	1.96	2.68
58	異文化理解につながる活動をしている	3.22	3.55
59	TTを行う人と呼吸をあわせて授業を進めている	4.43	3.91